

<書評>

浜林正夫著『イギリス革命の思想構造』

松浦高嶺 田中 浩
田村秀夫 今井 宏

はじめに 本書評は、水田洋氏を中心としたイギリス革命研究グループのなかの在京研究者四名が、下記の割り当てで各章を分担し、全員で討論を行なった共同研究の成果である。各章の紹介と批判は分担者の執筆により、はじめとおわりの総括的部分は、松浦がみずからの責任においてまとめたものである。

第一章・第二章 松浦高嶺，第三章 田中浩，第四章 田村秀夫，第五章・第六章 今井宏。

1

1959年に刊行された名著『イギリス市民革命史』につづいて、浜林正夫氏のイギリス革命研究三部作の第二部を構成する本著の課題は、おおむね次のごとくである。すなわち、「思想の革命」——イギリス思想史における近代思想成立へのコペルニクスの転回——をなしとげたホッブズが革命の思想家でなかったとするならば、17世紀イギリスにおける「革命の思想」とは、そもそもなんであったか。かかる意味でのイギリス革命思想の全体像を構成するための一つの手がかりとして、ピューリタニズム、ヒューマニズム、経験論、神秘主義という四つの思想類型を設定し、それらを代表的個人の思想に即して解明すること。そして究極的には、「革命の思想」のなかからその革命的な部分をきりおとしたところに成立するといわれる近代思想の評価の問題、つまり近代思想がその成立期において「革命の思想」からなにを受け継ぎ、なにを受け継がなかったかという観点から、これを再評価することが、著者の狙いといえよう。ほぼ以上のような問題の提起をもちこんだ「序章」

にはじまる本著の構成は、既発表論文を根幹とする次の六章から成り、巻末に「著作目録」と「索引」が付せられている。

第一章 ピュウリタニズムの思想——ジョン・オウエン——

第二章 ヒューマニズムの思想——ウィリアム・チリングワース——

第三章 経験論の思想——ジェームズ・ハリントン——

第四章 神秘主義の思想——ジョージ・フォックス——

第五章 平等派の思想分析

第六章 一八世紀への展望

以下、各章ごとに項をおって、内容を検討してみよう。

2

まず第一章の「ピュウリタニズムの思想」では、最初にオウエンを代表的思想家にえらんだ理由として、次の三点が指摘される。第一に、彼は政治的に一貫して革命の主流たる独立派に属したこと。第二に、比較的純粋にカルヴィニズムの教義をまもりつづけたこと。第三に、独立派思想の積極的かつ体系的な展開をもちこんだ著作を残していること。従来、独立派思想解明の代表的資料として利用されてきた『弁明の言葉』*An Apologetical Narration*は、長老派支配に対抗しようとする防衛的な姿勢のゆえに、また、もっぱら教会組織論に力点をおく限られた内容のゆえに、適切でないといわれる。そして、オウエンの著作の過半が（浜林氏の引用する著作のなかでも、その大部分が）王政復古以後に刊行されたものであるという時期的なずれは、一つの難点ではあるが、生涯をつうじての彼の思想の一貫性・統一性にかんがみて、致命的な難点ではないといわれる。

オウエン神学の究明は、教会組織論に限定されず、認識論、救済論、寛容論などにわたって、広汎かつ精緻な分析が試みられる結果、(1)個人主義と集団主義、(2)必然と主体的自由、(3)体制（支配）と反体制（抵抗）、(4)真理（良心）と政治的自由（権力）などの問題をめぐって、独立派ピュウリタニズム

の独自の姿勢が摘出される。すなわち、(1)信仰の強調が個人の主観への解体をもたらさず、バイブルを共通の教条として定め、しかもその正しい読み取り方の可能な根拠を「聖霊」(Holy Spirit: 個人に内在するもので、しかも個人を超えるもの)に求めることによって、個人主義と集団主義との揚棄がはかれる。(2)その救済論において、一方では神の絶対支配の思想をあくまでもつらぬきながら、他方では人間の主体的な努力の場が設定される。(3)その教会論において、セクト型教会観をとりながら、分離主義に反対することによって、アングリカンや長老派の体制支配の理念でも、分離派の抵抗体の理念でもない、「戦闘的教会の理念」が導きだされる。すなわち、「不純なものから分離して、みずからの純潔を守るのではなく、不純なものとしたたかい、これをうち倒すことによって純潔を拡大し、教会を全体的につくり直すこと」(50ページ)、これがオウエンの教会理念である。(4)オウエンの自由論の本質は、「真理によってこそ自由となる」に要約される。しかも真理はたたかいをとおしてこそ獲得されるべきものであり、真理の確立をさまたげる誤謬や陰謀・反乱に対する為政者の抑制権力は肯定される。以上がオウエン神学の特色であるが、著者はこれらを総括して、ウェーバーの救済予定説解釈への批判の意図をこめながら、「戦闘的教会の思想」——「神の敵に対する不屈の戦闘性」と「聖徒の連帯性」の思想をオウエンのピューリタニズムの特質として強調するのである。

わたくし(松浦)はかつて独立派の「中道」政策を総括して、「セクト型とチャーチ型、あるいは分離主義と非分離主義の中間を行く、すこぶる適応性に富んだ、しかしそれだけに理念としての主体的推進力に欠けるもの」と規定した(「清教徒革命における『宗教上の独立派』」、『史苑』23-1)。本著のなかでも批判をこうむったわたくしの見解は、浜林氏の指摘のとおり、その資料的制約のために一定の限界をもつことを認めねばならない。他方、オウエンの教会論の一見折衷的な構成の深奥に、彼の救済論や寛容論との総合的な理解によって、「戦闘性」を認めようとする浜林氏の積極的な評価は、

大いに示唆にとむものといわねばならない。しかし、わたくしは前稿において、Five Dissenting Brethren に「宗教上の独立派」を代表させ、彼らの言動を内乱前から、ウェストミンスター会議にのぞんで『弁明の言葉』を發表した時点を経て、独立派政権樹立に至るまで一貫して追跡した結果、彼らの中道政策の背後に「理念としての主体的な推進力」を確認することはできなかったのである。浜林氏はおもに王政復古後の著作をつうじて、オウエンの思想の文脈の中に「戦闘性」を発見したのであるが、氏の所説がいつその説得力をもつためには、オウエンの思想が「革命のための組織と行動の理論」として「どのような社会史的な影響をもちえたのか」という視角（60ページ）がつかぬかれ、それに対応する局面において、改めて「戦闘性」が確認されることが望ましい。私見によれば、革命のエネルギーとしての宗教的熱情（enthusiasm）は、やはり独立派より左の諸セクトに最大の高揚をみたが、それに共感し、それを当面の国家＝教会体制の「中からの改造」に汲み入れる能力をそなえた点に、独立派が革命の担い手たりえた真の理由が存したのではないか。17世紀イングランドがおかれた政治的・社会的条件下にあっては、そのような独立派の立場こそが、もっとも「革命的」であったとみなして差支えないであろう。ただしこの場合の「革命的」は、「戦闘的」の同意語ではないのである。

次に第二章「ヒューマニズムの思想」の検討に移ろう。「思想の革命」の局面にヒューマニズムの系譜を設定すると、それはフッカーによってうちたてられたアングリカン神学を受け継ぐ革命期の moderate Anglicans を媒介項として、ロックの宗教的寛容論へ結実してゆく。しかし、こういう系譜論とは別個に、本章ではチリングワースに代表される moderate Anglicans のヒューマニスティックな神学が革命のなかでどういう役割を果たしたかを、解明の主題とする。

結論を要約するところである。まずチリングワースの革命にのぞむ政治的

姿勢は、「いずれの側にも確信をもって味方しえないという不安と絶望」(79ページ)である。これに対応して、彼の宗教観においては、感覚や経験にもとづいて論証されうる認識の客観性に対して、信仰の主観性が強調されることから、「宗教的相対主義」への傾斜が認められる。また救済論においては、「心情主義」と「幅ひろ主義」(救済に必要な基本的信仰箇条における)が、教会論においては「日和見主義的体制肯定論」が特徴的である。これを要するに、チリングワースに代表されるヒューマニズムを「革命の思想」の次元で評価すれば、そこにはなんら積極的なメリットを認めることはできず、客観的には歴史の歯車のなかで反革命的な役割を果たしたといわざるをえないのである。以上の解釈に対して反論の余地はないが、革命期のヒューマニズムをまっぴらチリングワースのみに代表させたことの可否が、一つの疑問として残るであろう。

3

第三章では、17世紀イギリスにおいて、経験論的方法をとる社会思想の最初の思想家としてジェームズ・ハリントンがとりあげられている。ここで著者は、ハリントンの主著『オシアナ』(1656年)だけでなく、その他の著作も含めて、彼の理論や方法が、革命期の諸思想のなかでどのように位置づけられているかを詳細に考察し、その研究はきわめて水準の高いものとなっている。

著者はプロテクター制のもとで共和制のために活躍したハリントンが、(1)革命の初期には積極的に革命に参加せず、(2)のちに共和制を志向しつつも、彼の理論をカルヴィニズムや自然法思想〔レヴェラー的?——筆者〕によらず、歴史的経済論的考察方法を用いて基礎づけようとしたのは何故か?という問題を設定する。

著者は、最初ハリントンが革命に積極的に参加しなかったのは、彼がイギリスきっての名望家の出自であり、国王と個人的親交があったからだという

ラッセル・スミスやグーチの論をしりぞけて、それは、たんに個人的なものではなく、もっと深く思想的なもの、したがって階級的なものと考えなければならぬ、とする。

そのことを論証するために、著者は、革命の第一段階は思想的にはピューリタニズムによって代表されるから、ハリントンの宗教思想を追及し、彼がピューリタニズムをどう考えていたかをまず分析する。そして、著者は大要次のように、すなわち、ハリントンは一方ではイギリス国教会とは異なる、自発的な信者集団による国家宗教を主張し、それへの参加を欲しない信者集団は、まったくその良心のままに放置され、また彼の国家宗教は、宗教的な対立や信仰の自由の侵害が起らないように行政権によって看視しようとするための制度である、と規定する。他方、ハリントンがピューリタンによる聖者独裁に反対し、平等派を批判していることも指摘され、だから、著者によれば、ハリントンによって示されるイギリス経験論の歴史的状況は、革命の主体的な推進力となることにあったのではなく、革命を傍観し、ただその成果だけをつみとろうとする半ブルジョア的ジェントリのイデオロギーたることにあった、ということになる。

著者はさらに進んで、ハリントンの階級的立場を明らかにするために、その経済思想を分析する。ここで、ハリントンの経済思想はすぐれて農業＝土地所有に重点がおかれているため、著者もまた彼の農業問題に分析の重点をおく。そして、彼の思想のなかには、寄生地主的・農民的・近代地主的側面の三つが混在していることを指摘し、この三つの側面のうち、寄生地主的側面とブルジョア近代地主的側面とが、農民的側面を媒介することなしにつながり、いわば、彼の経済思想は原始蓄積の思想といえ、のちのロックの労働→私有権の成立→生産力の発展というシェーマである、ブルジョア階級のブルジョア的発展の基本線にそうものとされる。それと関連して、ハリントンの植民地観は、ブルジョア革命の対外的拡大を意図したものとして規定されている。

こうして著者の問題設定は、みごとに解明されたといえる。それは丁度、ホッブズ問題(絶対主権論と社会契約論の混在という矛盾)が、ホッブズの階級的立場を明らかにすることによって解明されたように。

革命期に出現した思想の諸類型を革命状況に密着させて分析するという本書全体の問題提起からすれば、かかる分析方法はきわめて有効なものといえよう。しかしここで気になるのは、彼の宗教思想や経済思想がとくに重点的にとりあげられている(このこと自体は従来ほとんどとりあげられてなかったもので、この研究のメリットと思う)が、政治思想がたんに彼の政治制度論の説明で終わっている点である。革命が権力の奪取や権力の再配分を要求するたたかいであるならば、革命思想の根本問題として、各諸党派がいかなる政治綱領や政治機構論をもつかはきわめて重視されなければならないであろう。だから望むべくんば、著者が平等派について試みたように、ピューリタニズム、ヒューマニズム、経験論、神秘主義などの原理論をふまえた革命諸党派の思想が政治思想にまで昇華させられて析出されれば、革命思想はさらに全体的関連をもって明確に位置づけられたであろう。ハリントンに限っていえば、彼の提出した政治機構論と伝統的制度観を対比すれば、17世紀なかばのイギリスという限界状況のなかで、その画期的意義は明白になろうし、だからこそ1658年以降の王政復古への傾斜の時期に反革命を阻止しようとするグループの強力な理論的武器となりえた点などについて、著者とはまたちがった評価がでてくるのではないかと思う。

4

第四章では、まず神秘主義的諸セクトが概観されたのち、革命期の神秘主義の特徴的な形体は、1640年代後半以降とりわけ50年代の活動に注目すべきことが指摘され、この時期の二大グループである第五王国論者とクェーカーとのうち「神秘主義の体系として、はるかにまとまっている」クェーカーの思想体系が、その創始者であるジョージ・フォックスを手がかりとして分

析され、イギリス革命期の神秘主義の一つの典型がしめされている。ここで著者は、クェーカーの「内なる光」の教えが、ヒューマニズムと同じく、宗教の個人主義化の方向をもち、セクト型教会論のいわば極限形体として、その内面的な性格のゆえに、カルヴィニズムにみられるような集団組織原則を欠き、まったく心情的な組織原理しかもちえないことを明らかにしている。さらに、初期クェーカーの平和主義について、それが政治的無関心あるいは現実逃避の静寂主義であることを著者は否定するが、フォックスの戦闘性は精神的内面的なものにかぎられ、「容易に現実逃避の静寂主義へ転ずる傾向をもつものであった」としている。「イギリス革命の思想像の複雑さをときあかす視角」として設定された思想類型化の一つである神秘主義の特徴は、第五章における平等派の思想分析のさい、この運動の敗北後におけるリルバーンのクェーカーへの転向＝「神秘主義への逃避」という説明にもみられる。

ところで、神秘主義をこのように類型化することは、フォックスを中心とするグループについては妥当するが、クェーカーのうちでもネイラーを中心とする過激派については修正を必要とし、さらに第五王国論者や40年代の諸セクトについては別の類型化が必要となるであろう。もともと、神秘主義的なセクトの思想は、革命の全期間にわたる民衆の思想であり、とりわけ40年代後半のそれは、平等派の包摂しえなかった広汎な民衆のエネルギーを表明する思想として、積極的に評価すべきものである。したがって、革命思想の全体像をときあかすという著者の視角からすれば、革命の高揚期と退潮期に対応して、神秘主義のしめす二つの側面を考慮することが必要であり、著者は注意深く神秘主義の「一つの典型」と断わってはいるが、退潮期における神秘主義の、第五王国論者とは対照的な特殊クェーカー的な対応の仕方のなかから、穏健派の代表者であるフォックスを素材として類型化を試みながら、そこから一般的に「イギリス革命における神秘主義は、民主主義を生みだす変革の思想とはなりえず、逆に革命のなかから生みだされたブルジョア民主主義は、神秘主義を圧殺することによって成立した」(176ページ)と結

論することは不十分といえよう。少なくとも、この結論の前半は、「民主主義を生み出す変革の思想は、神秘主義に思想的な表現をしめす諸セクトに代表される広汎な民衆のエネルギーに支えられて展開された」とあらためらるべきであろう。

5

平等派を扱った第五章は、「平等派の思想」ではなく、「平等派の思想分析」と題されている。著者の言によれば「ジョン・リルバーン、ウィリアム・ウォールウィン、リチャード・オーヴァートンという三人の平等派の指導者の思想を個々に分析し、まずその異質性を確認し、そのうえでそれが平等派として統一的に成立しうる条件と理由を考え、最後に平等派の解体後の三人の行方をたどること」（178ページ）こそが本章の主題をなしており、さらにそれに前章までに分析されたイギリス革命の思想の四つの類型が、いかに交錯しあっているかを「ときあかす一つのいわば応用問題であり、思想と行動との結びつきに関する一つの試論」という意図がつけ加わっている。「思想分析」と題されたゆえんはここにあり、したがって本章では、従来の研究史を賑わしてきた平等派の民主主義思想——政治的急進性と経済的小市民性の再確認といった視角は背景に退いているのである。

いうまでもなく本章でとりあげられた三人は、あくまでも行動の人であった。そこで著者は政治活動の展開に即しながら思想の発展を跡づけ、三人の思想の特徴を類型として検出するという方法をとる。リルバーンのばあい、神秘主義と結合したカルヴィニズムとならんで自然法思想と伝統主義が彼の革命思想を構成しており、党派文書とは別の彼個人の執筆した文書には、合理主義的な自然法思想とは異なるカルヴィニズムと伝統主義の残存が強調される。そして彼は、運動の敗北後には、周知のように神秘主義にたちかえって、その戦いの生涯を終えるのである。このような思想構成要素の多元性と流動性をもったリルバーンと比較すると、あとの二人の思想の枠組みは単純

であり、ウォールウィンは戦闘的ヒューマニズムを、そしてオーヴァートンは合理主義的無宗教性を柱として、平等派の戦列に加わり、平等派プログラムの形成に理論的貢献をなした、と分析されている。

このような平等派指導者の思想類型の異質性の抽出を通して、平等派の思想構造に新たな照明を浴びせようとする著者の視角は、従来の平等派研究のある意味での行きづまりを打破する一つの有効な視角として、高く評価されねばならない。ことにリルバーンの伝統主義、自然法による財産権擁護の論理は、17世紀イギリスの思想的土壌の理解のうえで、不可欠のものといえるであろう。しかしこうした問題にもまして注目されるのは、本章の主題の後半のもの、すなわちこれらの異質性のうえになぜ統一戦線が形成されえたかという「条件と理由」の考察である。一方における神秘主義的傾向のつよいカルヴィニズムに加うるに伝統主義（リルバーン）と、他方におけるヒューマニズムと合理主義（ウォールウィン、オーヴァートン）という二つの異なった思想の流れを媒介したものとして強調されているものに、次の二つがある。ひとつは、自然法の理論であって、自然法はまさにそれへの接近視角と内容の多義性のゆえに、媒介項たる役割りを演じえたのであった。もう一つの理由として著者があげているのは、リルバーンにおいてはカルヴィニズム的選民思想の大衆性と階級性の獲得であり、またウォールウィンにおける大衆の窮状への認識である。だが「統一の戦線の形成へすすんでいった素地」は「もはや論理や思想構造の枠をこえる問題である」（220ページ）という但し書きは、はたしてなにを物語るであろうか。問題はその「大衆性」と「階級性」にあるのであり、個人とは異なる運動の革命思想の評価は、大衆性と階級性の深みからとらえた組織の行動論理と思想構造にむけられねばならないのではないか。著者の分析が、個人を通しての思想構造の枠組みの抽出に重点がおかれたため、運動組織の思想構造とは必ずしも結びつかなかったのではないか。著者の鮮かな分析にもかかわらず、革命に登場する個人と党派の思想史的研究の方法論について疑問は残る。それは本書の全体において、

とりあげられた個人の社会的性格と革命における党派構成との関連の追求が、視角の外におかれていることと無関係ではない。ロンドンの徒弟→ピューリタニズム→戦闘性、ジェントリ→ヒューマニズム→日和見主義という類型論は、革命思想史においてどの程度の有効性をもつのか、疑問は依然として残るのである。

第六章は、前章までの検討をうけて、「ピューリタニズムの解体」「経験論の展開」「ジョン・ロック」という三本立ての視角から、「18世紀への展望」が企てられている。まず理性の時代の宗教思想を代表するものとしてカドワースがとりあげられ、その宗教思想が「神に対する人間理性の優位を宣言」するものであり、そこでは「新しい秩序の確立と安定とが模索され、要求されている」と指摘され、彼がアングリカン・ヒューマニズムの影響を受け、理神論にいたる思想的系譜に位置することが明らかにされる。ついで1650年代以降において「経験論という方法が、いわば一種の流行となったことの歴史的な意味」を問うケース・スタディとして、W・テンプルが考察の対象とされる。そして彼が経験論を理神論と結びつけることによって、理神論の道をさらに進め、またその合理的・世俗的な傾向よりして、「功利主義へ発展する思想の系譜」を形成した、と評価される。最後にジョン・ロックであるが、ここでの主題は「宗教論を中心に、ピューリタン革命の諸思想との関連を念頭におきながら、ロックの一面をとりあげること」（265ページ）に限定されている。そして彼の著書『キリスト教の合理性』を中心に分析が進められ、彼の宗教思想がその政治思想と同様に、王政復古の反動化と民衆運動への両面批判の姿勢をもっていたこと、またその内容が宗教的個人主義と相対主義の徹底化であったことが検証される。ロックにとっては、信仰の共同体も、ピューリタンの戦闘性も連帯性も不必要であった。「思想史における『近代』はこのようにして成立する。しかしそれと同時に、近代のもつ問題性もまたそこに生みだされていた、といわねばならない。」（278ページ）と

著者は結んでいる。このように終章は、全編の分析の有効性の認識のうえに立った「展望」なのであるから、あらためて著者の思想史方法論が問題とされねばならないであろう。

6

以上の各章の検討にもとづいて、最後に総括的な批判を試みてみよう。

〔A〕「革命の思想」の本質規定について。

原著の全体をあえて概括すれば、それは一方における「戦闘性」「連帯性」「大衆性」「階級性」など、他方における「相対主義」「心情主義」「日和見主義」「幅ひろ主義」「現状肯定論」など、いわば正と負の判定規準によって、四つの思想類型に「革命の思想」としての適格審査を適用したものであった。この点に関して、次の疑問を提起したい。

(1) 「革命の思想」たるに不可欠の本質が、ひたすら「戦闘性」「連帯性」「大衆性」「階級性」に求められることの可否。

(2) それらの本質の概念規定は、かならずしも明確でない。たとえば、ピュウリタニズムに立脚したオウエンの「戦闘性」と、リルバーンの「戦闘性」とのあいだには、微妙なニュアンスが感じとられる。

(3) 「革命の思想」の本質規定に関連して、イギリス革命期における思想類型の設定の仕方の適否の問題。著者は「序章」で、設定された四つの思想類型以外に、「これらとやや次元を異にして歴史主義あるいは伝統主義とでもいうべき思想があり、またこれにからみあいつつ対立する自然法思想もある」(12ページ)ことを認めているが、‘constitutionalism’と「自然権思想」を無視しては、イギリス革命思想の正当な理解は困難ではなからうか。

〔B〕「革命の思想」の分析方法について。

(1) 「戦闘性」や「連帯性」を個人の思想の脈絡のなかに確認するにとどまらず、それらが現実の革命政治過程のなかで、いかに機能したかを検証する必要があるはしないか。浜林氏の視角では、個人と四つの思想類型の関係

の解明に終って、個人と思想類型を媒介する党派がぬけている。ウェーバー流に言えば、思想と社会層ないしは党派集団とのあいだの「選択親和関係」の次元においてこそ、「革命の思想」の評価ははじめて可能である。

(2) 諸思想類型のからみあいの分析が、平等派に関してみごとな成果をあげているが、すくなくとも革命の主流たる独立派について、同じ試みが必須である。さもないと、本著からは独立派の革命思想として、「戦闘性」のみが浮き彫りされてしまうおそれがある。

〔C〕 「革命」と「革命の思想」と「思想の革命」について。

浜林氏の本著執筆の究極の意図は、「思想の革命」の解明というパースペクティブにおいては、断絶の部分としてみすてられ、あるいは死角に入ってみうしなわれがちな「革命の思想」を、「革命」のなかで正当に評価し、それによって「思想の革命」を再評価することにあつた。このユニークな試みは、17世紀イギリスの「革命」と「革命の思想」と「思想の革命」の三つの領域にわたって、傑出した業績を精力的に積みかさねてきた浜林氏によってこそ、はじめて可能であつたし、本著の広く深くするどい研究成果に対して、われわれは最大の敬意を表するものである。それゆえにこそ、以上の望蜀が許されると信ずるのであるが、結論として「革命の思想」を「革命」のなかに正当に評価するためには、イギリス革命のさらに的確な理解が望まれることを強調したい。「革命の思想」の本質規定と分析方法について、あえて異論をとらえたのも、その趣旨に他ならないのである。